

## 〔翻刻〕『贈答百人一首』（三）

はじめに

『贈答百人一首』は、江戸時代に刊行された、いわゆる異種百人一首の一つで、正確な刊年は未詳だが、編者緑亭川柳<sup>①</sup>による序文に「嘉永六癸丑」とみえる。百首は、基本的に贈答歌で構成されているなどの特色がみえるが、未だ活字化はなされていない。そこで、『贈答百人一首』の翻刻を数回に渡って試みる。本稿では、前稿に続き四十首目から五十九首までを掲載する。担当は以下の通り。

四十〜四十一―尾崎、四十二〜四十三―保手濱、  
四十四〜四十五―保手濱、四十六〜四十七―尾崎、  
四十八〜四十九―藤川、五十〜五十一―宮下、  
五十二〜五十三―玉田、五十四〜五十五―玉田、  
五十六〜五十七―宮下、五十八〜五十九―藤川、

### 凡 例

- 一、底本は、藤川架蔵本に拠った。
- 一、翻字本文には適宜、句読点、濁点等を施し、字体は通行の字体に改めた。
- 一、行取りは、本文に拠らず適宜改行した。

尾崎 良介 玉田 春香  
保手濱里沙 宮下 淳子  
藤川 功和

一、『贈答百人一首』の百首には、①、②…と歌番号を付した。

一、『贈答百人一首』の百首並びに上欄注において他書所伝が確認出来るものについては、【注】において書名を掲出した。

40 誘ひ来ぬ恨なかけそ波風のあらし浜辺は住かひもなし  
兼定卿 一条家夫人

41 もろともにすまはぞうさも忘貝波ふく風のあらし浜辺も  
一条兼定卿は、永正の頃より、世々土佐の国司なりしが、長曾我部元親は一条殿に恩ある身ながら、一条を押たをし、土佐七郡の内、元親六郡を領しなから、幡多一郡をも奪ひとらんと、一条家の雑掌、土居宗算といふ忠臣あるを、謀反あるよし風聞させ、主従の不和を計ひ、一条殿を押しこめ隠居とし、幼君に家を継せ、兼定卿籠居せるを何ものか、

一でうで作らたてたる紙ぶすまやぶれ立てはこしよめきもせず  
長曾我部が我まゝなるふるまひに、一条殿はありてもなきがごとく、今は詮方なく四国を退去して、豊後国に落、大友宗麟を頼みて、彼国に住給へり。御台はいまだ土佐にありて、なげき給へる中へ、兼定卿よりへさそひ来ぬの歌を送りけ

れば、御台涙ながらにこの返歌をなし給ひぬ。なをまた兼定卿のかたより、

思ひやれひとりくどくる夕なみの心づくしの浦のすまゐを

御台御返事に、

聞にさへ心づくしの浦のなみよるひるいかに袖のか、らん

兼定卿猶無念さんじ難く、たちちに味方をかたらひ、伊予の国へ押渡り、長曾我部が持城三ヶ所まで攻おとし、戸島といふ所に在陣し給ひしが、元親、一条家の家来入江左近を頼み、一条どのを討て呉なば、国の庄を与ふべき証文をわたしければ、左近欲に眼くらみて、主人の安否を訪さまにもてなし、奥に紛入て、兼定卿の左りの腕をうち落し、逃けるが、片手にて追打にきり給へば、左近も深手を負て死す。これより一条家も亡び、逆罪の元親、一度は栄へれども、是も末には家絶ぬ。

#### 堀無手右衛門

42 名和殿は道理の助となりたまへむりなる事をする身でもなし

#### 名和無理之助

43 軍をば大事とおもへ小敵もあなどらずして怪我をばしすな

英雄は志気英果にして閑静をたのします、天下に事ありてその才力を逞するをよろこぶ。安居して礼を守らんと思ふ時なりとも、眼前の群敵を見れば是を駆んと欲するは、英雄の氣象、豪傑の癖といふべし。されど進をしりて退をしらず、存を知りて亡をしらずれば、元竜の悔を生ずるもあるべし。

武田信玄信州表はたらきるとき、村上義清を討んと同国佐久郡にせめ入り、武者押の所、ある山陰の切所に敵屯をなして鉄を揃へまちうけたり。堀無手右衛門これを見て、朋友の名和無理之助にむかひて、「よき敵ござんなれ。いざ無理どの、あの勢のなかへかけ入りよき武者を多らみうちになして、大将の実検にそなへん」と言ければ、無理之助かうべをふり、「敵数百挺の弓鉄炮を揃へたる中はそつじにか、らぬものなり」と暫しためらひて居しゆへ、堀無手右衛門、「それは名波どの、日比の勇猛に似あはぬことばかな」と言つ、この歌をよみかけければ、無理之助寛爾とわらひ、へ軍をばとよみあはせて、はや時分はよしと駆出して鎧を入れ

ば、無手右衛門も同じく駆入、堅横むじんに突入りく、勇をふるつてた、かひつ、ふたりとも兜首を取、大将の実検にそなへける。軍さんじてのち此事陣中にもつはら沙汰ありければ、信玄二人をほめて、

武略をばいろく回す物ぞかしゆだんなければ恥ることなし  
兩人に盔を給はり、智勇をほめ、且感状を下され、その名を世に残せり。

#### 小幡山城入道

44 いがくし毛衣なれば手もふれずそこにてはたをくりあげてめせ  
馬場美濃守

45 おしつけて栗が毛衣はぎとらばいががんと人と人のいふへき

小幡山城は、小幡日城入道の息男にて、武田家股肱の臣也。天文の末、信州より諏訪頼茂、大軍にて甲州にら崎まで打入し時、一日に四度の合戦に、甲州勢、旗色悪く、いと危く見へし時、小幡入道にはかに、紙旗あまた拵へ、百姓を大勢語ひ、鯨波をあせせければ、是に恐れて信州勢敗しけるとなん。是、地下幡といふ軍法なり。夫、武は騒乱を撥ひ、文は和平をひらくの謂にて、英傑も、文なきは人をなづけるにかたし。

ある時、小幡山城の許より、いが栗十五斗り生りたるを枝折にして、馬場美濃守の陣所へおくとて、此歌を遣しければ、かゝる騒しき陣中によくこそと感じ、美濃守この返歌せられけり。実に烈しき場にも、文を捨ざるは英士なり。馬場美濃守は、甲州随一の軍法者にて、武勇勝れし人也。  
或徒然のとき、諸士に示して曰、「凡剛敵の逃ると、弱敵の逃ると二色あり。強敵は、必ず窪き所へ逃あつまり、討る、までも働かんとす。弱敵はかならず高き所へ逃上る。其後、諸所へ逃ちる。これを追に心得ある。剛敵は、窪みへ集らぬやうに方便をすべし。弱き武者は高き所へ心付、追討すべし。たとへば、山嶺に出、獸を追に、猪などの手負て逃のぶる事なり難きときはよき。つまりへ走人殺さる、までも、牙をならし刃向ふ也。又、狐、兎などは全その心なく、高き所へのみ逃る也。獸さへ剛弱の逃やう二ツあり。況や人においてをや」

ひく敵も道のゆくすゑ見分すはふかくた、かふことをつ、しめ

46 世の中は荊の下のかぎ蔵むづかしければおらぬなりけり  
虚空無一左衛門  
佐々木義秀

47 よの中はいばらの下のかぎわらびむづかしけれどおればおらる、  
永禄十二年四月、將軍義昭公は、織田家の助力にて、三好一党を追退、相国寺より、  
二条の新御所へ移り給ふ。然るに其夜、南門に落書あり。歌に、

なき跡のしるしの石を取あつめはかなく見へし御所のていかな

これ、いかなる事と思ふに、今度二条の御所造営、ことの外急ぎ給ふに依て、  
遠国より石を集るとも遅きにより、加茂平野西山の辺に古寺の大破に及びし所に、  
苔むしたる石でもあるを、幸ひ取入れれば、其中には石塔なども多ければ、かく  
のごとく落書はせし也。「これ、無一左衛門がせし業なり」と告る者あれば、かれ  
が居宅千本通へ捕手をつかはし、からめ取て、二条の御所へ引来る。義昭公、怒  
を發し、刑罪におこなはんと、評義ありしに、信長公はいきどほりて、「彼を四  
条河原にて、釜煎にもせん」など、宣ふを、江州の佐々木義秀、取なし諫めて、  
「彼、いまだ白状も致さず。定りたる証拠もなく、且は彼を憎めるもの、讒言もは  
かりがたし。昔より、落書を立るは、誤りを改るため也。罪のうたがはしきは、  
軽く致す習ひ。いまだ洛中も静ならぬ時なれば、慈悲の御計ひあり度義」と申け  
れば、義昭公、理に迫り、彼を助命の沙汰に及びけり。然るにその、ち、佐々木  
は本国近江へ下る道に、旅人平伏して落涙して居たりければ、郎党に尋さするに、  
彼無一左衛門にて、よそながら、恩を謝す也。かれにとあて、「汝は都の者と聞し  
が、何国へ行や」とあれば、無一左衛門、世の中の歌にて答申せば、義秀、この  
返しを詠給ひけり。これ、伯夷叔斉の心を底に含みて、面白き贈答なり。

48 難波江の蘆のした根のしたむすびたつ夕煙行かたもなし  
僧貞円

49 よるべなきあしわけ小舟こがれてやさわる人目のひまもとむらん  
笹丸

三井寺法師貞円は、碩学の聞えある僧也。ある日、さくら会舞ける児の笹丸と  
いへるに、清滝の社のうしろ、無量光院の池の辺にて物いひそめてより、夜  
となく昼となく、忘れもやらず、小車のめぐりあふせのいわ枕、ひまもる風の便  
りに思ひを通はせ、はつ蔵の下もえにこがる、をあはれにおもひ、忍山の山賤の  
なげきこる身もいたはしく、夢ばかりの語らひはなしければ、岩はしの夜の契  
は待遠く、貞円ある夕ぐれに、笹丸のへやに來りければ、笹丸はにこやかに「へ  
夏衣よくこそ」と言けり。貞円このことばをきくと、ひとしく坐を立て帰りゆく  
を笹丸よび戻し、「なにとてものを言ず帰り給ふや」といへば、「さればよ夏衣」  
といひしま、かへりはべりぬ。『新古今集』なる素性法師の歌に、  
をしめどもとまらぬ春も有物をよばぬに來たる夏衣かな

此歌の心を思ひはべりてと恨みければ、笹丸き、てなか／＼さにあらず、  
夏衣ひとへに我はおもへども人の心のうらやあるらん

かくよみければ、貞円がこゝろもとけ、久しく睦みかたらひけり。然るに、笹  
丸成人して、亡親の年回にあたる年、里より申來りて、髪剃おとし、さまをかへ  
けるに、貞円清滝の社のうしろで見せめしを思ひ出、  
今は又見てややみなん清たきのかみのうしろにありしすがたを

笹丸かへしに、  
もろともに誓しことを忘れずはかみのうしろに今はなくとも

50 残なく散べき春の暮なればこすゑの花の先たつはうき  
武田勝頼室  
土屋の妻

51 かひあらじつぼめる花はさきたちてむなしき枝のは、のこるとも  
天正十年の春、甲州武田勝頼、数度の戦ひを失ひ、老臣小山田左衛門がす、  
めによりて鶴郡岩殿へ落給ひしが、小山田心変りせしかば、鶴瀬より道をかへ田  
野の山辺に入けるに、敵襲ふ事急なれば天目山に落給ふ。かく果敢なくなり給へば、  
今迄無二の味方なりしもみなこゝろを変じて逃うせ、従ふものさになかりしか  
ば、土屋宗藏涙ながら主君に御最期をす、め、自ら二心なき証を御目に懸んと五

才になる子を近付、「汝はいまだ幼少なれば、人々と同道はしがたし。お先へ参り六道のちまたに待奉れ。父も御供にて追付也」と申せば、詞に従ひ西に向つて手を合せ念仏となへければ、土屋は首をうち落す。大將はじめ、ありあふ人々泣ざるものはなかりける。勝頼の奥方なみだにくれ、彼が母の歎きを不便と思し、へこのりなくの歌を送り給へば、土屋の妻は前後の弁へなきてゐたりしが、此歌を承り少しこゝろをとり直し、おしいたゞいて涙のひまに、恐れながら御かへしいたさんと此歌を詠じける。

扱、土屋は妻に向ひ、「若が妹二才なるを汝にとらす儘つて落のび、命あらば尼にもなして父兄があとを訪はせよ」といへば、妻はさらに得心なく、共に自殺して果なんとせしを土屋さまに言含め、最期の場の邪尸也とむりに鞍置馬にしはりつけ、十丁斗り東の方へ追出。

主従最期の盃取かはし、覚悟の時、奥方は文認め古郷小田原へ送り、なげきを思ひて、

ねにたて、さぞな惜まんちる花のいろをつらぬる枝のうぐひす  
斯て敵間近く来れば、奥方は称名となへつ、自害して果給ひぬ。

武田勝頼

52 朧なる月もほのかにくも霞はれて行衛の西の山の端

土屋宗蔵

53 面影の身をし放れぬ月なれは出るも入る、もおなし山のは

武田伊奈四郎勝頼は、新羅源氏卅一世の名跡をついで勇猛無双の大將なれど運のきはまる時なるや、織田勢と戦ひ軍利を失ひ、たのみし味方小山田が倭弁に惑はされ、岩殿へおちけるに小山田をはじめ近臣みな心を变じ、多くの従兵ちり／＼になりはて、敵軍国中にとりつめ、はや防戦の術つき果て田野といふ所にあつまり、最期の盃をなして用意のとき、敵兵大ぜい鯨岐の声をはつし乱れか、れば、落残つたる兵どもはげしく防ぎ戦へば、二、三度は迫退けれども、寄手雲霞のごとくなれば、側近く取つて、はや御運は是までなり、御首を給らんと働きければ、勝頼いかつて佩刀をぬきもち推参なりと切はらへば、土屋兄弟おなじくす、み勇

をふるべば、敵卒ども数多前後に切伏たり。跡なるせいは是を見てためらひさ、へて居たりしかば、勝頼寛爾と多みをふくみ、「今はよき時刻なり。土屋敷皮直せ。腹切ん」と言給へば、「うけ給はる」と申て敷皮奉れば、「宗蔵よく介錯まぬれ」と座に直りて、辞世とおぼしてへおぼろなるの歌を詠じければ、土屋宗蔵とりあへずこの返しに、へおもかげの、歌をよみ、さて勝頼しばし経の誦文をとなへ給ひ、高らかに申称名もろとも、御年つもりて三十七才、終に田野の草葉の白露と消させ給ふ。あはれはかなき事どもなり。土屋は御死骸に抱付、やがて御供申べくと涙に呉て居たりしに、又敵兵群欠りて太郎信勝の切腹を妨ぐるありさまなれば、宗蔵いかりて太刀うちふり、勇威をあらはす有さまは恐れぬ者はなかりけり。

太郎信勝

54 あだに見よ誰も風のさくら花咲散ほどは春の夜の夢

土屋直利

55 夢と見るほどもおくれ世の中に嵐の桜ちりものこらじ

太郎信勝は、父勝頼存生の時、申給へることばに、「自は一栄一楽、是しゆんしうたるが、汝はいまだ齡たらざればむざんなり。武田の家督にも直らずしてかくなり果るこゝ、つぼめる花の春にあはずして、嵐にもまれ落るがごとし。無念なり」と宣へば、信勝き、て打笑ひ、「いや、是はくるしからず。衆樹の千歳終に朽ぬ。樅花一日はおのづから栄をなす。はやくも遅くものこらめや」とありて、

まださちる花と惜むな遅くともつひにあらしの春のゆふくれ

さて信勝は宗蔵が弟直利に向ひ「よく介錯まぬれ」と申つけ、辞世にへあだに見よの歌かき遺し、生年十六才にて、腹一文字にかき切給へば、土屋直利なみだをはらつてこの返しに、へ夢と見るの歌をよみ太刀取直し、信勝の顔見上るに、「ぼうく眉に薄化粧、その御容は実に楊梅桃李の花ひらきたる風情にて、天人の影向か。此世の人とは見へさせたまはず。雪のはだへのあらはれて、何れへ剣が立られ申さん」と涙滝なす斗にて、歎きに沈みて消入る所を、猶も間近く鯨岐のこゑ聞へければ、今はぜひなく介錯なして、御なきがらにいだきつき泣伏してゐたりしが、兄宗蔵言けるは、「お二方とも御腹召れぬ。さらば思ひおく事なし。い

ざ最期のはたらきして、死人の山を築んず物を」と言ければ、「さもそうづ」と兄弟うち連太刀打ふりて切立れば多くの敵をうち破りぬ。「余り人を失ふのも、後の世の罪ならん。いざ最期を急がん」と兄は廿五、弟は廿二、さし違へて果けれど、名誉は世にのこしけり。此六人の小伝『理慶尼の記』より抄出せり。

56 花の本へまたこのはなをまゐらせばふた花こゝろいもや恨みん

岡谷入道  
法橋紹巴

57 をのづから風の便りにとはるればうらむ人もあらぬ梅が香  
岡谷入道は伊勢長島の産にて、大和太納言秀長に仕へし人なり。頓作狂歌など上手にて、世の人は賞美せり。

羽柴秀長、ある時病氣によりて引こもり居給ひ、医術をつくし給へどしかとしるしも見へざりしゆへ、南都の貴僧、高僧を御殿へ請じて御祈禱いみじくなさせ給ひけるしにや、頓て本腹し給ひければ、上下悦ぶ事かぎりなし。岡谷入道も御悦びにあがりて、

かぢりきに病ひはいつてまかるしやなそはたや運のつよき君かな

秀長卿き、給ひて悦びの余り、種々引でもの給ひしとなん。

又ある春、此入道庭の梅の盛りなるを一枝折て、花の本の歌をそへて紹巴の元へおくりければ、紹巴もよろこび此返歌をなしたり。

常に贈答ありて風雅の人なり。紹巴が名誉は人のしる事なれば抄せねど、又おかしく戯れし事も多し。

ある時前田徳善院玄以の方へ参られければ、ひめめす馳走になり庭を詠め興じてるしに、玄以法印の仕ひける小性とも種々物語りなどして、折しも新らしき扇一本に硯を取そへ紹巴に向ひ、「近頃は、かりながら、狂歌一首書て給はるべし」と申ければ、紹巴即座に筆をそめて、

こしもとにさし遣はれて骨折に主人の気にもあふぎなるべし

又、年の始に鶯の来て軒端に啼ければ、

さのふよりけさかけてなく鶯ぞたうとかりけるほけきやうの声

北野にて折袴連歌の時、

かくなるものかさすらへのはて

此神のかへりきたのあとたれて

此付句、神慮に叶ひ社頭震動す。

58 契りをばこの松原に残しをき帰るさしらぬ袖のいろく

小寺休夢  
天王寺屋宗及

59 余所にやは涼しき風も夏の夜の明るをしらぬ箱崎の松  
天正十五年六月、豊臣秀吉公は九州を責随へ、帰陣の時、筑前博多の町に着給ふ。此所、前に兵火のため荒野となりしかば、箱崎の神殿を本陣として、廿余日この地に逗留し給ふ。この頃、都より千の利休下りて、日々茶会を催し、同八日、利休が仮家へ秀吉公渡らせ給ひ、御遊びあり。又十三日には、天王寺屋宗及方にて御茶を奉る。小寺休夢はいつにても御相伴御供にて、ことの外御意にかなひし人なり。同十八日、箱崎の松原海道の南、夷堂の東北にて、松ヶ枝に鎖をかけ、雲竜の小釜をつり、松葉をたき、茶を奉る。

千とせをもた、み入たる箱崎の松に花さくをりにあはゞや

太閤かくよみ給ひて、休夢、宗及にも仕るべきよし有ければ、兩人とも詠ず。此歌ども秀吉公誉させられ、甚だ御気色よく、短冊共箱崎の宮に納め、今に什物たり。爰に老松数十株ありて、御茶屋の松原といふ。この宗及は、大徳寺江月菴和尚の父逢世法師と号す。千の利休に相繼ての茶道也。十九日には、秀吉公御陣所にて、博多の富商神屋宗湛、島井宗室に御茶をくだされ、又、廿六日には、宗及かたにて御茶奉る。宗及爰ぶきの御茶屋いと風流なりと御意に入。さて、御茶すぎて宗及が向なる小寺休夢が所にて御連歌有。秀吉公御発句に

しほがまの浜辺涼しき窓のまへ

立よるかげにしげる松竹

この巻のすゑのかたに休夢

たちならべたる門のにぎはひ

博多松幾千代迄や立るらん 秀吉公

【注】

一、【注】において掲出した作品の内、和歌作品については、原則として『新編国歌大観』に拠り、その他の引用文献は、特に断らない限り小学館「新編日本古典文学全集」に拠った。

一、本稿初出の作品の底本は以下の通り。

- 『理慶尼の記』―「和泉書院索引叢書」十一
- 『室町殿物語』―「東洋文庫」
- 『醒睡笑』―「日本随筆大成」第三期・四
- 『太閤記』―「新日本古典文学大系」
- 『神谷宗湛筆記』―「続群書類従」
- 『筑前国続風土記』―「益軒全集」四卷
- 『黒田家請』―「益軒全集」五卷

40～41 兼定卿・一条家夫人

〔上欄注〕

- ・一条家の雑掌／不和を計ひ
- ―『四国軍記』巻第四「土佐一条家没落の事」
- ・一条殿を押しこめ／幼君に家を継がせ
- ―『四国軍記』巻第四「土佐一条家没落の事」
- ―『南海通記』巻の十二「幡多一条殿退去記」
- ・一でうで…
- ―『四国軍記』巻第四「一条兼定卿臼杵に赴き給ふ事」
- ※四句「破れ果つれば」
- ―『南海通記』巻の十二「幡多一条殿退去記」
- ※四句「破れ果れは」
- ―『土佐物語』巻第八「中村の陣并に内政朝臣大津城に移らるる事」

※四句「破れ果つれば」

- ・長曾我部が我がままなるふるまい／ありてもなきがごとく
- ―『四国軍記』巻第四「土居宗算諫言の事」
- ・四国を退去／彼国に住給へり
- ―『四国軍記』巻第四「一条兼定卿臼杵に赴き給ふ事」
- ・長曾我部が持城三ヶ所まで攻おとし
- ―『土佐物語』巻第五「一条殿予州合戦の事」
- ・伊予の国へ押渡り／腕をうち落し、逃けるが
- ―『四国軍記』巻第四「入江左近奉殺兼定卿事」

42～43 堀無手右衛門・名和無理之助

〔和歌本文〕

・名和殿は…

- ―『甲源武田三代軍記』第六・「薩埵山軍附駿府花澤等開城並繩無理介之事」※初句「無理之介」、三句「名乗るべし」、五句「為身でもなし」

―『絵本甲越軍記』第二百六十四回・「花澤落城併繩無理之介事」

※初句「無理之介」、三句「名乗べし」

〔上欄注〕

- ・敵数百挺／よみかけければ…
- ―『甲源武田三代軍記』第六・「薩埵山軍附駿府花澤等開城並繩無理介之事」

44～45 小幡山城入道・馬場美濃守

〔和歌本文〕

- ・いが／し…
- ―『曾呂利狂歌咄』巻第四
- ・おしつけて…

―『曾呂利狂歌咄』巻第四

〔上欄注〕

・ある時、小幡↪返歌せられけり

―『曾呂利狂歌咄』巻第四

〔46〕〔47〕虚空無一左衛門・佐々木義秀

〔上欄注〕

・南門に落書あり↪沙汰に及びけり

―『江源武鑑』

〔48〕〔49〕僧貞円・笹丸

〔和歌本文〕

・難波江の…

―『続後撰和歌集』恋歌一・六六〇・「九月十三夜十首歌合に、

寄煙忍恋」・鷹司院師※初句↪四句「なにはなるあしのしのや  
のしたむせびたてじや煙」

―『題林愚抄』恋部一・六三六二・「続後撰」・鷹司院師※初句「な  
にはなる」第四句「たてじや煙」

・よるべなき…

―『題林愚抄』恋部一・六三四二「永和元九十三御会」・前関白  
近衛

〔上欄注〕

・今は又…

―『続門葉和歌集』恋歌・六二七・「さくら会まひけるわらはに  
三井寺なりける僧、清滝のやしろのうしろ無量光院の池の辺に  
て物申したりけるのち、ほどなくさまかへぬとききて彼僧申し  
おくりける」・読人しらず

・もろともに…

―『続門葉和歌集』恋歌・六二八・「返し」・三宝院慈氏丸

〔50〕〔51〕武田勝頼室・土屋の妻

〔和歌本文〕

・残なく…

―『理慶尼の記』

・かひあらじ…

―『理慶尼の記』

〔上欄注〕

・天正十年の春↪果給ひぬ

―『理慶尼の記』

・ねにたて…

―『理慶尼の記』

〔52〕〔53〕武田勝頼・土屋宗藏

〔和歌本文〕

・朧なる…

―『理慶尼の記』

・面影の…

―『理慶尼の記』※四句「いづるもいるも」  
〔上欄注〕

・武田伊奈四郎勝頼は↪用意のとき

―『理慶尼の記』

・勝頼いかつて↪呉て居たりしに

―『理慶尼の記』

〔54〕〔55〕太郎信勝・土屋直利

〔和歌本文〕

・あだに見よ…

―『理慶尼の記』

・夢と見る…

―『理慶尼の記』 ※結句「ちるはのこらじ」

〔上欄注〕

・自は一栄一楽ゝ立られ申さん

―『理慶尼の記』

・まださちる…

―『理慶尼の記』

・御なきながらにゝのこしけり

―『理慶尼の記』

〔56〕〔57〕岡谷入道・法橋紹巴

〔上欄注〕

・ある時病氣にゝつよき君かな

―『室町殿物語』 卷十一・七一・「狂歌物がたりの事」

・かぢりきに…

―『室町殿物語』 卷十一・七一・「狂歌物がたりの事」 ※二句「やまひはいで、」

・ある時前田徳善院玄以ゝほけきやうの声

―『室町殿物語』 卷十一・七二・「紹巴に」 狂歌所望の事

・こしもとに…

―『室町殿物語』 卷十一・七二・「紹巴に」 狂歌所望の事

・きのふより…

―『室町殿物語』 卷十一・七二・「紹巴に」 狂歌所望の事・作者不詳

・北野にてゝ杜頭震動す

―『醒睡笑』 卷之四・「聞多批判」

・かくなるものか…

―『醒睡笑』 卷之四・「聞多批判」・作者不詳

・此神の…

―『醒睡笑』 卷之四・「聞多批判」・作者不詳

〔58〕〔59〕小寺休夢・天王寺屋宗及

〔和歌本文〕

・契りをば…

―『黒田家譜』 卷之四

〔上欄注〕

・千とせをも…

―『太閤記』 卷十

―『黒田家譜』 卷之四 ※第二句「たゝみいれおく」

・しほがまの…

―『神谷宗湛筆記』

―『黒田家譜』 卷之四

・立よるかげに…

―『神谷宗湛筆記』

―『黒田家譜』 卷之四 ※「立よるかげの」

・たちならべたる…

―『神谷宗湛筆記』 ※「たてならべたる」

―『筑前国統風土記』 卷四

・博多松…

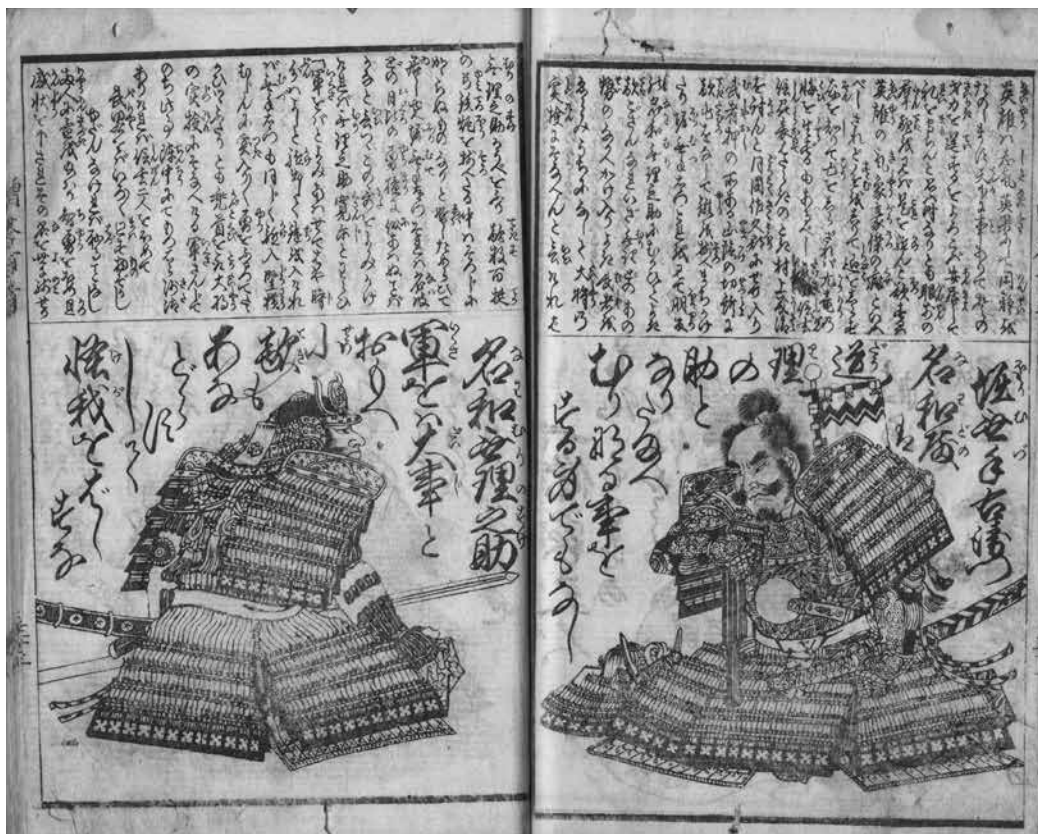
―『神谷宗湛筆記』 ※「つのるらん」

―『筑前国統風土記』 卷四 ※「博多町」「つのるらん」

〔付記〕

本稿は、平成二十七日尾道市立大学学長裁量教育研究費、研究テーマ「緑亭川柳編の異種百人一首に関する基礎的研究」（代表者 藤川功和）による研究成果の一部である。











[illegible][illegible]

